



カーテンが閉まっっていて、外は見えない。けれど、分かる。今、雪が降っている。

鈴音は、それを確かめたくて、少しカーテンを開けた。「やっぱり」

窓の外、暗い空から次々と、雪が落ちてくる。

鈴音は、家の中においても、雪が降っていることを当てることができる。

あまりにも、勘が当たるので、自分には特別な能力があるような気がする。

「雪は、私のことが好きなのかな。だから、こっそり教えてくれるのかもしれない」

(鈴音に会いたくて、空から降りてきたよ……)

鈴音は、窓明かりに照らし出された雪が、地上に降りるのを見ていた。

いつまでも外を見ている鈴音に、和彦が声をかけた。

「鈴音、冷えるからカーテン閉めろよ」

「お兄ちゃん、見て、雪いっぱい降ってるよ」

「まいったな。あしたは朝から雪かきか」

和彦は、中学校で野球部に入っている。この町は十一月から四月の半年間、雪でグラウンドが使えない。屋内練習だけでは体力がつかないと、家と学校前の雪かきが義務付けられている。

「鈴音は、お気楽だよな」

「お兄ちゃんだって、雪好きでしょ」

「それは去年まで。小三のガキと一緒にするな」